

ここが

ここには、差出人であるわたしの名前を、自分で書いています。

かつては、身分の高い公家や武家ほど、たくさん名前を持っていた。氏名・家名（苗字）・通称名（官途名）・実名などです。わたしの場合はこの時、源・細川・兵部大輔・藤孝、でしたね。

細川兵部大輔から改行して、「藤孝」とサインである花押を署名しています。



ここに「臨江」とあります。これは、当時連歌師の第一人者だった里村紹巴さんのことで、永禄8年（1565）から「臨江斎」と号していました。

わたしもいささか連歌を嗜んでおりまして、紹巴さんにはたびたび同座してもらい、勝龍寺城にも足を運んでもらいました。光秀さんが、「時は今……」と本能寺の変の決意を込めたと言われる「愛宕百韻」にも同座されていましたね。

ここに「明十」とあります。これは、明智十兵衛尉を省略したもので、明智光秀さんのことです。このころの光秀さんは、織田信長さまのもと比叡山の焼き討ちで功を立て、近江国滋賀郡を与えられて坂本城の普請に精を出していました。また、それまで両属する状態であった足利義昭さまを見限られたのもこのころのようです。

義昭さまを将軍にしようと、共に戦国乱世に旗を立て、いよいよ大名にと意気込んでいましたが、まさかこの10年後に本能寺の変を起こされ、山崎の合戦、帰らぬ人になるとは…、よもや思いもしておりませんでした。



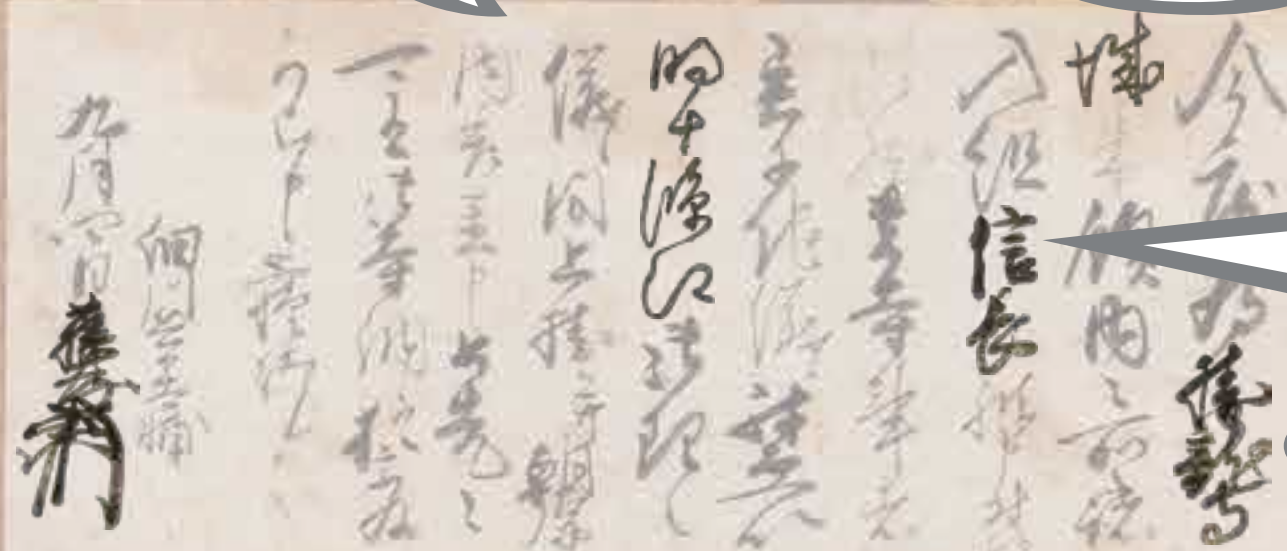
POINT



言わずと知れた、織田信長さまのことです。わたしは、そもそも将

軍足利義昭さまに仕えており、信長さまとの間を取り次いでいました。

このころ、お二人の関係が悪化し、武田信玄をはじめ敵対勢力に囲まれて、厳しい戦いを強いられていました。



ここには「勝龍寺城」とあります。応仁の乱以来、京都防衛の要地となり、前年の元亀2年（1571）に織田信長さまの命令で、わたしが“城”として普請したものです。

翌年の元亀4年（1573）、桂川以西の乙訓地域を信長さまから与えられました。それ以降、わたしは「細川」から「長岡」へと家名（苗字）を変え、細川家が丹後・九州へ移っても、終生名乗りました。わたしにとって、はじめての領地であった当地、城主デビューした勝龍寺城は、「殿主」で公家三条西実枝さんから古今伝授を受けたり、従兄弟の公家吉田兼見さんがたびたび遊びに来られて囲碁や密談に興じたり、息子忠興と明智光秀さんの娘玉さんとの婚礼があったりと、いろいろと思い入れのある場所ですね。



いおっ いおっ いおっ
幽斎です

去年見つかってしまいました
わたしの書状
若かりし、藤孝だった頃を振り返って
ご説明いたしましょう

細川幽斎像(部分) 天授庵提供